

通潤橋を尋ねて

今日 あした

「熊本城は石垣がとて有名です。加藤清正公が……」
バス旅行の一団を前に、ピンクのスーツ姿のバスガイドが、良く通る声で抑揚をつけながら説明をしている。

なるほど水際はなだらかだが上に行くほど垂直に近くなっている。

「石垣は精巧で、美しく組み上げた石の一つ一つが生命をもち、個々の役目を果たし続けているのでございます」

さすがガイドさん、白手袋の手の平を上向きにして、首をほんの少し傾げ、石垣を指し示す姿が決まっている。

とは言っても、私はバス旅行の一団ではない。三時すぎに熊本空港に着いてレンタカーを借り、今ここに来たばかり。たまたま耳に入ってきた言葉に、気持ちがいちいち反応している。これなら一人旅でも大丈夫だろう。

「西南戦争の時も、この城は落とせなかったのでございます」
「なるほど」

今朝のことだ。定年退職をして毎日が日曜日生活になったばかりの夫と、派手に喧嘩をした。

朝食をとりながら一緒にテレビを見てみると、鎌倉の明月院の紫陽花が写ったので、

「去年、珠子さんとここに行ったのよ、ほら、高校時代の友達の」、と言った途端、夫はそんな話は聞きたくないと言わんばかりに、言葉も発せずテレビのチャンネルを変えてしまった。

「見ていたのに……」 不満げに言う私の言葉は、完全に無視。

家にいるようになってからいつもこの調子だ。その上小言だけは際限なく、「緑」、「緑」と怒鳴らない日はない。何でもかんでもケチをつけ、馬鹿のチョンと言われ続け、私は切れた！ちなみに緑は私の名前だ。

「しばらく実家に行ってきます」

実家は鹿児島だが、親はもういないのに、いい年をして喧嘩したから帰って来たともいえず、多少土地勘のある熊本に降り立ったのだ。

時間が遅かったので、熊本城は観光客がまばらで、アベックや散歩に来ている人がちらほら。城や石垣が大きく、砂利が敷かれている道も広々としている

ので人が小さく見える。

敵の侵入を防ぐための堀も、鉄砲を撃つために城壁に穿たれた穴も、敵将の首をさらす石もあるが、それが戦の為に作られた物とは考えられないほど風化している。梅雨時なものによく晴れていて風が心地良い。

思い切つて来て良かった。

城を出て、近くの観光案内所に行き、一人でも気楽に泊まれる宿を紹介してもらった。ほつとして、市民会館のレストランで、熊本城のお堀を眺めながらコーヒーを飲んでいると、夫が定年になってからの、この三カ月のことが、頭を駆け巡る。私の行動や、話す言葉のすべてを否定する、あの態度！

ダメダメ、不愉快なことは考えない！ 気分転換に来たのだから、と自分に言い聞かせた。

紹介された民宿は、大正解だった。保養所にあるような、しもたや風の佇まいで、家族的と言うのか、泊り客は学生の一団と私だけ。夕食は、十人くらい座れるような大きなテーブルを囲んで、一緒にとるようになっていく。

宿の主人の誘導が上手くて、息子よりも若い学生達とすぐに打ち解けた。彼らは、同じゼミの仲間で石垣を調べているようだ。

久しく、まともな会話など交していなかったので嬉しかった。

「城壁、石垣、石室などを調べていると、石材にはそれぞれ異なる顔があつて、石組をする時に、その時期の流行があるみたいですよ」。向かいに座ったリーダー格の人が言った。

石組みに流行があるなんて、考えてもみなかった。石を研究する人たち？ 緑は、これまで目にしたことがなかった世界に触れてわくわくした。

「緑さん、明日はどこに行くんですか」

隣に座った、自己紹介で三雲雄一郎と名乗った青年に聞かれた。

私は石塚緑です、と自己紹介をしたのだが、学生たちに、「石塚さん」やおばさんではなく「緑さん」と言われたので、ちよつと若返った気分だ。

「熊本城は、今日行ってしまったし……まだ何も決めていないのですよ。どこかお薦めスポット、ありますか？」

「緑さんは、レンタカーでしたよね」三雲が言った。

「ええ、そうよ」

「それなら、通潤橋は知っていますか」

「いいえ、知らないわ」

「一見の価値はありますよ。他のみんなは、教授が待っているから、ここから

列車で鹿児島まで移動するのだけど、僕は卒論でその石橋を使いたいから、見に行こうと思っっているんです。行ってみませんか、僕、車の中で通潤橋のことをレクチャーしますよ」。

「面白そうねえ」と言いながら、地図を見ると、そう遠くはなさそうだし、同じ道で高千穂峽にも行かれそうさだ。

「ご一緒させてもらおうかしら」と私。

「いいですよ。ところで、レンタカーは緑さんもちですよね」。

「勿論よ、嬉しいわく、三雲君、よろしく」

「三雲、うまいことしたな」

「ちやっかりしているよ」

「緑さん、気を付けて下さいよ、こいつ手が早いから」

「おばあさんをかかわらないでください！」

こんな風に、明日の予定が決まった。

翌日は、快晴だった。他の学生たちとは民宿の入り口で別れ、三雲と私は駐車場に向かった。

彼は、細面で髪は癖っ毛、中性的な感じの可愛い男の子で、背も私と同じ、一六五センチくらい。その日は、白と紫のストライプの厚手綿シャツ。その下に、ピンクのTシャツがのぞいている。ズボンはくたびれたジーンズだが、紺色のスニーカーは、真新しく、黄色いひもが付いていた。それに大きなアイボリーの布のバックには黒の持ち手がある。突飛な色の組み合わせだが、とてもよく似合っている。お洒落なのだろうな。

運転は私がすることにして、彼は助手席に収まった。

「その通潤橋って、場所はどこな、町の名前をナビに入れるわね」

「通潤橋で出ていると思うけど、一応 矢田部町を目指しましょう」

「では発車しまーす」

車を発進してしばらく走ると山道に分け入った。細い崖道で下には川が流れているのだろうが、全く見えない。対岸の山に度々野生の藤の花を見かける。それは濃い緑や、新緑の眩しい緑の中に、薄紫のかんざしのような垂れ下がった花をつけていて、景色に彩を添えている。

「あれ、藤の花よ、きれいね」緑が言うと、

「どこですか？ ああ、藤が藤棚以外の所で咲いているのを初めて見た」

「あまり目立たないものね」

「でも、きれいです」

「でしよう、ところで、通潤橋ってどんな橋なの？」

「緑さん水道橋って知っていますか？」と、反対に質問をされた。

「ええ、外国の写真で見たことがあるけど」

「通潤橋は日本最大のアーチ式水道橋なんですよ」

「へー、そう言われても良く解らないけど、いつ頃出来たの」

「一八五四年だから江戸時代の末期かな、一八五三年にペリーが来航したから、日本の大変動期に、熊本の一郭で水との戦いをしていたのですよ」

「それはそれは……」

「では、通潤橋物語の始まり、始まり！」三雲はおどけて言った。

「通潤橋のある谷部郷の白糸台地は、標高四百メートルを越す高さで、八つの村に分かれていて、三百世帯が住んでいました。

はい緑さん、頭の中に地図を書いてください。

三方を川に囲まれた白糸台地は、梅雨時ともなると大量の水が降り注ぐけど、そこに降った雨は、少しばかり畑を潤すだけで、周りの川に流れ込んでしまうから梅雨が明けると、田畑でんぼたはからからで湿り気も残らない。緑さん、ここままで、いいですか？」

「はい、良くわかるわよ。高地にある白糸台地に田畑を作るのは至難の技だったのよね」

「真夏の暑い太陽が照りつける頃には、深く掘った井戸も枯れて、田んぼどころか、野菜にやる水なんか、下の川まで汲みに行かなくっちゃならない。これじゃ暮らしていけない、なんとか水を引くことは出来ないだろうか、って村人が話し合って、

『谷部郷の惣庄屋に頼んでみたらどうだんべえ』、ってことになりました。

その惣庄屋の、布田保之助っていうのは、三十を過ぎたばかりなのに、谷部郷の七六の村をまとめていたんです」

「ずいぶん若くして惣庄屋になったのね、保之助は」

「惣庄屋っていうのは、世襲で受け継がれるんですよ。

保之助の親父さんは良い惣庄屋で、水路を造ったり、植林したり、近隣の詳しい地図を作って調査をしたりして村人に慕われていたんだけど、藩の役人の無理難題に逆らって自殺に追い込まれたんです。保之助が十歳の時だったんだけど、野辺送りの時には村人の長蛇の列ができたんだって。

保之助は一六歳で惣庄屋になる時、親父さんの代わりをしてくれていた叔父さんからこの話を聞いて、自分も谷部郷の人々の為に尽くそうって心に決めたんだって」

「ふーん、三雲君、見てきたみたいね」

「緑さん、いやだなあ。来る前に、子供の頃に読んだ通潤橋の絵本を引っ張り出して見てきたんですよ。専門書よりずっとわかりやすい！」

「それで保之助は、村人のためにその橋を造ったのね」

「そうだけど……、今のように技術のノウハウや機械があるわけじゃないから、物凄く大変だったんですよ」

突然、バラライカの陽気な着信音が、車の中に鳴り響いた。

「ちよつと、ごめんなさい」。路肩に車を寄せ携帯を取り出してみると、夫からだった。

「もしもし、今ドライブ中だから、電話を切るわよ」

「おい、どこにいるんだ、鹿児島島の兄さんに電話をしたら、来てないって言うていたぞ」

「電話なんかしないですよ。今、熊本に来ていますけど、しばらく一人旅をして帰りますから」

電話を切ると、三雲が、ぽかんとしてこちらを見ていた。決まりが悪くなり「ドライブインがあったらお茶でも飲んでいきましようか」、と言って、あわてて車を発進させた。

「三雲君のご両親はご健在なの」

「はい、両親は上野で民宿をやっています」

「じゃあ、君も手伝ったりするんだ」

「しよつちゆうですよ」

私は笑いながら、良い青年だなと思った。

彼はドライブインでお茶を飲んでいる間中、保之助が、何度も失敗をしながら、橋を架ける算段を繰り返す様子など、身振り手振りを交えて話してくれた。

それから車に乗ってからも、ずーっと。

「それで、保之助は成功したの」

「はい、でも、道のりは長いです」

私は内心、まだ続くのか、とうんざりした。

「その頃、近隣の砥用郷に霊台橋を架ける工事が始まった。地域で一番大きな橋で、保之助は勿論、何度も応援に行き、手伝いながらせつせと視察をした。出来上がったのを見て、これなら白糸台にも作れるんじゃないかと思って、霊台橋を造った棟梁の^{うすけ}刃助を訪ね、頼み込みました。

まずは測量から始めた。便利な水準器なんかから、夕方薄暗くなって両岸に、三本のろうそくに火をともし、地図を広げて同じ高さの所に印をつけて

いく。昔のことだから一事が万事この調子で何もかもが大変な作業なんだ」
まだまだ、三雲の話は続くが、私の頭はついて行かない。

「うちの民宿に学会があると泊まっていく先生がいて……、僕が小さい時から来ていたから、いわゆるお得意さんだったんだけど……」

私は運転しながらもブーツとしていたらしい、いつ話が変わったのだろう
「僕がまだ小さい時に、その先生が『通潤橋』の絵本を置いて行っちゃって、結局、それが僕が先生のゼミに入るきっかけになったワケ」

本を置いて行ったのは、三雲が小さかった時でしょう、どうやら私がブーツとしていた間に彼は成長して、今はその先生のゼミに入ったらしい。

「三本のろうそくで測量した地図をもとに、橋の高さを計算すると、三十メートルも必要になる」。熱の入った三雲のレクチャーは続いている。

「卯助は、『無理だ！』と言った。

『白糸台地は、霊台橋の倍も高さがある。ってことは、難しさはその何倍にもなるんだ。出来ねえものは出来ねえ』。

諦めきれない保之助。寝ても醒めても、どうにかならないものかと考えながらほつつき歩いていた。時はちょうど梅雨時、雨が毎日のように降り続いている。

雨傘をさして下を向いて歩いていると、足元の地面から水が噴き出しているではないか。どうして？ 思わず立ちどまってじっと見てから、見上げると、水は生き物のように、雨どいを超えて溢れ出ている。縦樋たてどいに流れ込んだ水は、地面に埋まっている横樋のつまっているところから、地表に勢い良く噴き出していたんだ。

これだ！ 保之助は閃いた。そしてサイホンの原理に思い至った。

出水孔の水位は、入水孔と同じ高さまで上がって来るんだ。これで、川の水を白糸台地の畑まで上げられる！ って。

保之助の試行錯誤の日々が始まった。考えが浮かぶ度、熱心に卯助に相談した。はなっから駄目だと思っていた卯助も、段々にやれば出来るのではないかと、っていう気になった。

二人はもう夢中になって、あーでもない、こーでもないと言い合いながら、最後は、土台を高くし、橋自体はもっと低くして、水を吹き上げることにしたらどうだんべ、ってことになった」。

「どうだんべ、なんて本当に言ったの？ 三雲君！ 話は佳境にはいりました！ っってとこね」

緑はノリノリでちゃちを入れた。

「えっへん！ それから、二人は構想を練りに練り、これならいける！ ところまで漕ぎつけてから、水路の模型を作ったんだ。ここに来るまでに、なんと四年もの歳月がたっていた。

出来上がった大きな模型を水路に置いて、実験開始！
流れて来た水は模型の取り入れ口に勢いよく流れ込み、水を上に運んでいった。

うまくいった！ と思った瞬間、模型は音を立てて崩れ去ってしまった。想像を超えた水の重さだったのです」

「えー駄目だったのー、保之助は、どんなにか無念だったでしょうね」

緑は、さっきまでの眠気はすっかり飛んで、いつの間にか三雲の話に夢中になって聞き入っていたのだ。

そして、働き盛りだった頃の夫のことをふと思い出した。

毎晩午前様だった夫は、ある晩、全身に酒の臭いを漂わせながら私の布団に入ってきて、ぎゅうっと抱きしめた事がある。その時、わけもわからず、ただ夫の無念さとか、悔しさが凝縮されて私に伝わってきた。

保之助も、つらかっただろうな。奥さんはいたんだろうか？

「緑さん、今、ううっ」って、言いませんでしたか」

「……言わないわよ」

「そうですかあ」と、言った三雲の顔が、いっばし大人に見えて、私は慌てて、

「でも、保之助はあきらめなかったのよね」と、話を戻した。

「諦める、っていう言葉は、保之助の辞書にはないのです。

結局、水の力に耐えるように、石をくり抜いて水路を造ることにした。

保之助の頭の中には、穴をくり抜いた四角な石が、橋の上を長い管となって連なっている姿が浮かんだ。

橋を渡す長さは七五・六メートル、噴き上げ口から取り入れ口までは一二六メートル。厚さ五十センチの石を使っても二百五十個も必要になる。

白糸台地に田んぼを作るには、一万五千立方メートルの水がいる。

三雲は、助手席でメモを読み上げながら言った。

「長い橋を造るのね。一万五千立方メートルの水といっても想像がつかないわ」
「普通の二五メートルプール一杯で、大体六百六十立方メートルだから、二十
三杯ぶんくらい」

「もつとわからなくなった」

「それじゃあ数字は省き、たくさんの、にします。

たくさんの水を流すには、石の管を三本並べなくてはならない。それを支え

るには従来より橋の強度が何倍も必要になる。どうすればいいのか、次から次に難題が出てくる。

保之助は専門家でもないのに、自分が作った綿密な設計図を卯助に見せながら、一生懸命に彼に説明した。

卯助はそんな保之助にすっかり惚れ込んでいた。なんとか期待に応えて白糸台に橋を架けるにはと考えて『そうだ石工の宇一と弟達も仲間に入れたらどうだろう』と保之助に進言した」

「保之助は、すごいわね。惣庄屋なのに……、橋の専門家じゃなかったのじゃ」

「凝り性だったのじゃないの」と三雲。

「その石工の宇一と兄弟たちのルートっていうのがすごいんだ。

九州には城壁だけじゃなくて、石橋や、石垣なんか……石の文化ってものがあるんだよね。仲間になった宇一も、その弟たちもみんな優秀な石工なんだけど、その優秀なルートっていうのは……」

「三雲君、ずいぶん勉強したのね、それに良く覚えているわね」

「はい、僕もゼミの先生に惚れ込んだから！」

「へーっ、三雲君の家の民宿に泊まるお得意様の先生ね。で、宇一兄弟のルーツがどうしたの？」

「宇一兄弟の祖父は、藤原林七といって、長崎の奉行所で働く下級武士でありました。緑さんは、長崎に行ったことがある？」

「ええ、あるわよ」

「出島の近くの中島川に、百メートルおきぐらいに、石橋がかかっていたですよ」

「そうね、いろんな形の橋があったわ」

「そのいろんな橋は中国人が架けたと言われてるけど、いくつかは、オランダ人が架けたものなんだ。宇一兄弟の祖父、林七が若かりし頃、その中の眼鏡橋に興味を持った」

「眼鏡橋？ ああ、あったわ。興味を持つわよ、突飛だったもの」

「林七は、そこで偶然知り合ったオランダ人から、眼鏡橋の造り方を教わったんだ。

だけど、その頃の日本は鎖国だったから、外国人と接触したらつかまっつ牢に入れられちゃうでしょう。

林七はオランダ人と付き合っていることがばれそうになったから、武士を捨てて隠棲したんだ。ってことは、武士を捨てて、オランダ人から学んだことを実践する道を選んだってことなんだ。そして、砥用郷に近い種山村に住みつい

て、農業の傍ら石工の研究を始めた。

林七が、最初の石橋を完成させるまで、移り住んでから二十年もの歳月がかかった。だけど、その技術は、子や孫に受け継がれて、今日の宇一達兄弟があるってわけ」

「それが、宇一兄弟の優秀なルーツなのね」

保之助が架ける橋は、棟梁が宇一、技師長（設計）は、その弟の丈八（二三歳）それに、その又下の弟、甚平も加わった。

「技師長が、一三歳？」驚いて聞いた。

「そう、勘がよくて、呑み込みが早い。その上、やる気満々、恐れを知らない」「見て来たようなことを言うわね」

「宇一、丈八、甚平が加わって、橋造りに一層熱が入った。何といっても若い、やる気満々の奴らだから、これでもか、これでもかってアイデアを出して来る。

『今度造る橋は、武者返しの工法をとることにしよう』、そう言って、熊本城を参考にして、高い壁なので、崩れないように、飛び出さないようにと、いろいろな工夫をした安全装置を取り入れた。

武者返し工法は、熊本城にもあるけど、丈八は、それだけじゃ安心できない。そこで、まったく新しい事を考えた。

今までにないほど高い橋だから、壁石が膨れ出ないように鎖石で両方の壁面を引っ張ることにした。

鎖石は、石と石の合わせ目に鉄を入れて、石と結び付けるといふもの。こうすれば、石の重みで押し出されない。これは、丈八が考えたもので、通潤橋にしかない工法なんだ。これで段取りは出来上がった。

大工は、奥山で木を切り、それをいかだで運び、川に柱を立てて半円形のやぐらを組んだ。林七がオランダ人から教わった、眼鏡橋の工法だ。

こうして、気の遠くなるほど木と石を使って、細心の注意を払って、着々と工事は進んだ。

半円形になった木組みの上に、輪石を並べていくんだから、丁寧に一つ一つ槌で叩いて、ひび割れはないか、隙間はないかって確かめながらの作業だ。角石が並べられ、隙間にも角石がぎっしり詰め込まれて、徐々に石橋の円い形が出来上がってきた。最後になめ石を入れる作業がある。要石っていうのは、肝心要の要なんだ」

「円い橋が、宙に浮くのですもの、崩れちゃ大変！ きちんと納まらないとね」「何てったって肝心要、眼鏡橋造りのメインイベントだからね。」

高い橋のてっぺん、輪石の一番中心に、棟梁の宇一と、技師長の丈八が立って、しつかり打ちこんでいった。

「ぎしっ」と音を立てながら、かなめ石は隣の輪石を押し広げて埋まっっていく。そして、「どすっ」と両隣の輪石の間にきれいに納まった。要石がはめこまれ、橋の形が出来上がると、今度は郷の人達が角石をどんどん運んで隙間を埋めて平らにしていく。

そして橋の上を自由に歩き来できるようになった。

最後に、水路となる穴が開けられた石を、三列に並べていく」

「試行錯誤の成果だもの、保之助も卯助も嬉しかったでしょうね」

「白糸台地の人たちだって、待望の水が畑を潤すんだから力が入るよ」

「工事事務所がある白糸側は、矢部郷の人達が、臼で漆喰をうったり、こねまわしたりして、それを運んだ。

石工が、運ばれてきた漆喰を石の管に塗って、しつかり抑えつける。 たくさんの人たちが、井桁に掘られた水漏れ防止用の溝に漆喰を入れては、それを棒で突っつきこむ。

保之助は『百年持たせるように百回突っつきこめ』と大声で怒鳴り、石工も、漆喰をこねている人達も、最後の仕上げだ！ と、笑顔で槌を振り上げ一生懸命突っつきこんだ。

石の数は七百五十。その一つ一つに十センチ角の溝が掘りこまれているから、突っつく溝は三千もあるんだ……まあ、それまでの大きな石を積み重ねてきたことを思えばたいしたことないかあ。

近くの郷からも手伝いが来て、水路はどんどん出来上がっていった。 橋の真ん中に置いた三本の水路、それぞれの真ん中に、一五センチ位の放水用の穴が開けられた。

これは、水路の中にとまったゴミを、時々吐き出し、掃除をするためのもので、二本は上流に向け、一本は下流に向けた。橋の揺らぎを少なくする為だ。 一本は、放水口を少し小さく、二本は大きくした。噴き出す力を同じにして、調子をとるためだ。

地震でも石が割れないように、一本の水路に四か所、直径七〇センチの松の木をくり抜いた管を入れた。松は水にもくさりにくい上、振動を伝えるにくくて、地震にも耐えうるから。

こうしておくとも、もし水つまりがあっても、ここで簡単に修理ができるしね」

「地震対策も、メンテナンスも至れり尽くせりなのね」

「矢部郷の、八つの村の田を作るのに、大量の水が必要だから、吹き上げ口は、取り入れ口より一・八メートル低くした。新しく出来る白糸台地の田に必要な

水量を、実験や計算から割り出して、一日一万五千立方メートルとした。これは現在の計算で出された結果とほぼ一致しているんですよ。

大量の水が勢いよく流れるから、管を守る為に水圧を弱めなきゃなんねえ、そこでカーブを付けたりして……」。

「きめ細かいのね。でも、橋のイメージが、よくわからないわ。山と山の間の、谷から三〇メートル位の高さの所に、アーチ状の石橋を架けたのよね。その上に三本の石の管で水路を造ったところまでは、理解出来るけど、たまったゴミをはきだすのが、橋の真ん中なんでしょう」

「今は使われていないけど、観光用に時々放水するって書いてあったから、運がよければ見られるかも知れないよ。ここからクライマックスだから、もう少し先に進むよ」

カーナビを見たら、後二十分で、到着すると出ている。

「ねえ、お腹が空かない？ 到着する前にお昼にしましょうか」

交通量の少ない寂びれた国道沿いのドライブインには、ちょうどお昼時で、何台か車が止まっている。

「ここにしましょうか」

入ってみると、小ざっぱりして、外見より良い感じだった。

「私をご馳走するから、何でもいいわよ」

「ごっつあんです」大げさに頭を下げて、壁のメニューを指さし

「阿蘇牛のかつ丼、って書いてあるけど、僕は、あれにしよう」

「ご当地グルメね。わたしもそうするわ」。注文を完了。

「緑さんの旦那さんってどんな人ですか」

三雲は、さっきの電話を気にしているのかも知れない。

「んー、暴君、かな」

「ええっ！」と言いながら、彼はボクシングの構えをして、右手で打つ真似をした。

「まさか！」笑ってしまった。

「暴言を吐く人。昔はね、物知りだし、何でも出来るから、私の持ち物の中で一番いいものだと思っていたのよ」

「持ち物ですか？」

「そう、それがね、今では向こうが私のことを、自分の持ち物だと思っているみたいなの」

「へえー。あ、僕の家は民宿だから、夫婦で休みもなくて二十四時間一緒に、喧嘩をすると何日も口も利かずにそっぽを向いているけど、僕はもう慣れちゃ

った」

「ふふふつ、犬も食わないのよね」

「何ですか、それ！」

食事が来たので慌てて食べて、目的地に向かった。

「橋造りも、いよいよ最終段階だから、向こうにつくまでに、橋を完成させます」。助手席に落ち着いて、三雲が言った。

「白装束に身を固めた保之助が出来上がった橋の真ん中に座った。橋の下で、造る時に組み立てた木組みの四隅に、卯助と宇一たち三兄弟が立った。

保之助の脇に控えていた太鼓が、どんどんどんと、だんだん音を大きくしていつて、ぴたりと止まった。

四隅の四人が「準備よし」と大きな声をあげた。

太鼓の音が「どーん」と、谷間に響き渡ると同時に、四人は一斉に槌で木組みを打ちはらった。

その瞬間、大きな地響きがして、台地が揺れ動き、砂煙が立ちこめた。

やがて煙はうすらぎ、支え木の無くなった石橋の上に、白装束の保之助の姿が浮かび上がった。

「保之助さんは、感無量だったでしょうね」

「失敗したら自決する覚悟で懐剣まで用意していたって書いてあったから」

「やったー。成功だー」大勢の村人たちの歓声が起こった。

通水の時刻が迫ったことを知らせる、合図の太鼓が響き渡る。

取り込み口を見る者、吹き上げ口で吹きあがる水を見たい者が、みんな走った。

合図とともに、取り込み口で、堰き止められていた水は、怒涛の勢いで流れ落ち、三つの水路に吸い込まれた。

どっと歓声が上がった。

水に負けまいと走り出す子供や若者が、橋の中ほどまでも来ない内に、吹き上げ口から水が吹き上がる。続いて流れてくる水の音。みんなの歓声。

水は怒涛のように吹き上げ、ぐるぐる廻って白糸の用水路へ流れて行った。

一八五四年七月二十九日 完成。

「到着したわよ」と私、

三雲の話が終わると同時くらいに、通潤橋の駐車場に車を止めた。広々とし

た川原が、駐車場の一段低い所に広がっている。右側には土産物を売る、ログハウスが建っている。

「緑さん、放水していますよ」。三雲が、興奮したように指さしながら言った。あまりに広い河原の、両側の山の中腹に、長い石の橋がまるで空に浮いているように架かっかけていて、その橋の中央から橋と直角の方向に、大量の水が放物線を描いて下の川に向かって落ちていた。

遠景なので、風景に溶け込んで、ただの美しい景色にしか見えなかったが、近くに寄ってみると、幅の広い滝が、はるか上の橋から怒涛のように落下している。

想像を絶する光景だった。

三雲は、到着した途端に、ちっともじっとしていません。橋の上まで行って、水の取り出し口を、走って橋を渡り、吹き出し口ものぞきこんでいた。

私はそれを目で追いながら、人生で一番脂が乗っていた頃の、我が家のお正月風景を思い出した。

夫の勤める会社は、年末から年始にかけて、コンピューターの端末を止めてもあまり差し障りのない時に、プロジェクトを計画していた。夫は、まるでお祭りにでも行くように、張り切って会社に行き、泊まり込んでいた。

我家は二世代同居の大家族で、お正月ともなると、夫の兄弟が連れ合いと、子供達を連れて、泊りがけでやって来る。料理を山のように作り、お年玉が飛び交い、良く喋り、良く笑った。

長年勤めあげた夫をおいて出てきてしまったけど、おとうさん、どうしているかな。

三雲が戻ってきたので、

「三雲君、これからの予定は？ 見学するところがあつたら、ご一緒するけど」と言うと、

「鹿児島に行つて、みんなと合流します。緑さん楽しかったです。今度はお袋と来ます」

「え、恋人じゃないの」と言いながら、握手をして別れた。

一人になって、家に電話をした。

「緑です。今、通潤橋に来ていますけど、よかつたら、大分空港まで来ませんか。レンタカーを借りているから迎えに行くけど」

「じゃあ、別府の旅館を予約してから行くよ」と夫。

旅館に落ち着いて乾杯。昨日からのことを、逐一話した。

めずらしく夫の返事が返って来た。

「通潤橋は、放水をして、中に詰まったゴミを定期的に外に吐き出すんだよ。良く見られたね、日曜日でもないのに」

「そうなのよ、たまたま観光バスが見学に来ていて、頼んで放水をしてもらっていたのよ」

「それは運が良かった。放水一〇分間で、一万円なんだよ」

「何でも、良く知っているわね」

顔を見合わせて笑った。

完 (11, 344字)